

七尾市

須曾ウワダラ遺跡

中能登町

水白モンシヨ遺跡

金丸宮地遺跡

2012

石川県教育委員会

(財)石川県埋蔵文化財センター

須^す曾^そウワダラ遺跡
水^み白^{しろ}モンシヨ遺跡
金^{かね}丸^{まる}宮^{みや}地^ぢ遺跡

2012

石川 県 教 育 委 員 会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は須曾ウワグラ遺跡、水白モンシヨ遺跡、金丸宮地遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地はそれぞれ石川県七尾市能登高須曾町、鹿島郡中能登町小竹および尾崎、鹿島郡中能登町金丸地内である。
- 3 調査原因は石川県水道用供水供給事業であり、同事業を所管する石川県環境部水道企業課（現地調査時石川県企業局）が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 発掘調査は石川県教育委員会が昭和58（1983）年度から平成23（2011）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 発掘調査に係る費用は石川県環境部水道企業課が負担した。
- 6 現地調査は昭和58・60年度に石川県立埋蔵文化財センターが依頼を受けて実施した。各遺跡の調査期間・面積・担当者は下記のとおりである。
 - (1) 須曾ウワグラ遺跡
期 間 昭和60年6月13日～同年6月20日
面 積 100㎡
担当者 田嶋 明人（専門員）、中島俊一（主査）、栃木英道（主事）
 - (2) 水白モンシヨ遺跡
期 間 昭和60年11月18日～同年12月25日
面 積 300㎡
担当者 田嶋明人（専門員）、中島俊一（主査）、栃木英道（主事）
 - (3) 金丸宮地遺跡
期 間 昭和58年9月19日～同年10月28日
面 積 180㎡
担当者 平田天秋（専門員）、垣内光次郎（主事）
- 7 出土品整理、報告書刊行は、石川県教育委員会からの委託を受けて財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成23年度に実施した。出土品整理は調査部特定事業調査グループが、報告書刊行は調査部関係事業調査グループが担当した。報告書原稿の作成・編集は澤辺利明（調査部特定事業調査グループ専門員）が行った。
- 8 調査には下記機関の協力を得た。
石川県環境部水道企業課、七尾市教育委員会、中能登町教育委員会
- 9 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 10 本書の凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は磁北である。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図と写真、観察表で対応する。
 - (4) 観察表には、報告番号や出土遺構、種類、器種、調整等の遺物観察事項のほか、出土品整理時の実測番号を記載した。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第2章 須曾ウワダラ遺跡	3
第1節 調査の経緯と経過	3
第2節 既往の調査	4
第3節 調査の結果	4
第3章 水白モンシヨ遺跡	8
第1節 調査の経緯と経過	8
第2節 既往の調査	9
第3節 調査の結果	9
第4章 金丸宮地遺跡	15
第1節 調査の経緯と経過	15
第2節 既往の調査	16
第3節 調査の結果	17

挿 図 目 次

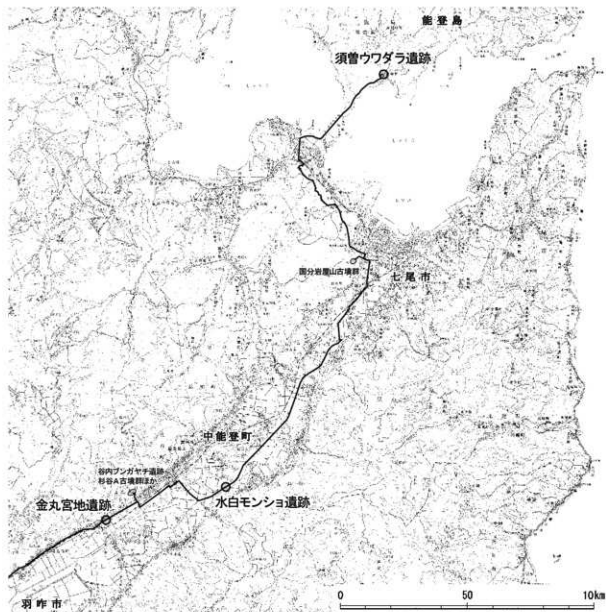
第1図 遺跡の位置	1	第10図 調査区全体図 (S=1/100)	11
第2図 送水管経路と発掘調査箇所 (S=1/150,000)	2	第11図 遺構断面図 (S=1/60)	12
第3図 遺跡の位置 (S=1/25,000)	3	第12図 出土遺物実測図1 (S=1/3)	12
第4図 調査区の位置と既往の調査 (S=1/1,000)	4	第13図 出土遺物実測図2 (S=1/3)	13
第5図 調査区全体図 (S=1/60)	5	第14図 遺跡の位置 (S=1/25,000)	15
第6図 出土遺物実測図 (S=1/1、1/3)	6	第15図 調査区の位置と既往の調査 (S=1/2,000)	16
第7図 遺跡の位置 (S=1/25,000)	8	第16図 調査区全体図 (S=1/100)	18
第8図 調査区の位置と既往の調査 (S=1/2,000)	9	第17図 遺構断面図 (S=1/60)	19
第9図 調査区合成図 (S=1/600)	10	第18図 出土遺物実測図1 (S=1/3)	19
		第19図 出土遺物実測図2 (S=1/3)	20

表 目 次

第1表 第1次拡張事業にともなう発掘調査	1	第4表 出土遺物観察表1	21
第2表 出土遺物観察表	7	第5表 出土遺物観察表2	22
第3表 出土遺物観察表	14		

図 版 目 次

図版1 須曾ウワダラ遺跡	図版4 金丸宮地遺跡1
図版2 水白モンシヨ遺跡1	図版5 金丸宮地遺跡2
図版3 水白モンシヨ遺跡2	



第2図 送水管経路と発掘調査箇所 (S=1/150,000)

引用・参考文献

- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム古代北陸の土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 柳本英道 1997 「付章 寺家遺跡昭和60(1985)年度発掘調査報告」『寺家遺跡』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 土肥富士夫 1985 「因分岩屋山古墳群」七尾市教育委員会
- 平田天秋 2001 「附 須曾ウワダラ遺跡の調査」『史跡 須曾蝦夷穴古墳Ⅱ—発掘調査報告書—』能登島町教育委員会
- 松浦信臣・堀田 修 1986 「続能登の化石資料」『石川の自然』第10集地学編(5) 石川県教育センター
- 三浦純夫 2003 「金丸宮地遺跡」財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 安井重幸 2003 「鹿西町沢ソウケダ・宮地遺跡」鹿西町教育委員会
- 安中哲徳 2001 「金丸宮地遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 山本直人ほか 1989 「石川県鹿島郡鹿島町水白モンシヨ遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 吉岡康暢・橋本澄夫 1966 「石川県鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡の土師器」『石川考古学研究会々誌』第9号 石川考古学研究会
- 四柳嘉章 1997 「能登国における土師器の編年」『中・近世の北陸』桂書房

第2章 須曽ウワダラ遺跡

第1節 調査の経緯と経過

邑知地溝帯中を進んできた送水管は七尾市の受水地点である七尾市岩屋町（土肥 1985）で中能登丘陵縁を北西に進み、七尾市石崎町からは能登島大橋を經由し七尾湾を渡り最終受水地である能登島にいたる。この能登島（旧能登島町）地内では須曽分教場跡地において、県事業による県水流量計室、および、ここから島内へ送水する町事業による東部送水ポンプ場設置が計画された。計画地には須曽ウワダラ遺跡が所在することが知られていたことから昭和59年4月26・27日に分布調査を実施し、山側部分は分教場建設の際に削平されていること、盛土がなされていた低位の海側部分は遺跡が遺存していることが確認された。この結果を受けて施設位置をより山側に変更したが一部遺跡にかかる箇所が残し、この部分については発掘調査による記録保存とすることとなった。県事業にかかる範囲は100mである。以後、昭和60年4月10日付けで石川県企業局能登送水工事事務所から石川県立埋蔵文化財センターあてに発掘調査の依頼がなされ、5月10日付けで埋文センターは発掘調査計画書を提出、6月1日付けで能登送水工事事務所と埋文センター間で発掘調査委託契約が締結された。また、4月30日付けで文化財保護法第98条の2第1項の規定による発掘通知を文化庁あてに提出している。



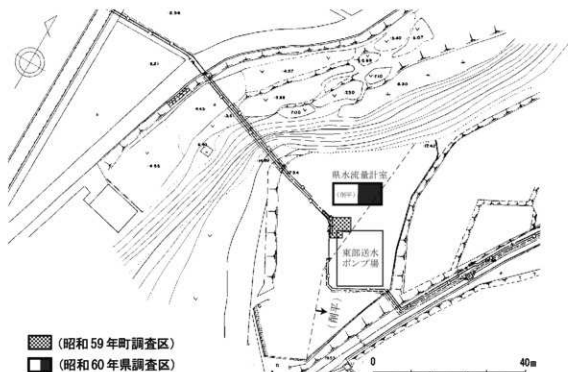
第3図 遺跡の位置 (S=1/25,000)

現地調査は6月13日に着手し、6月20日に終了した。調査担当者は田嶋明人(専門員)、中島俊一(主査)、栃木英道(主事)である。

なお、昭和59年度冬季に町事業に係るポンプ場建設工事が実施されたが、その際、隣接する県発掘予定区域の一部が崩落した。その復旧作業の際に調査区南西半部(第4図黒枠内白抜き箇所)が削られてしまったことから、実質発掘区域は北東半部のみとなっている。

第2節 既往の調査

遺跡は能登島西南部、七尾湾に面した須曾入り江背後の丘陵緩斜面、標高約18mに立地し、須曾分教場建設の際にその存在が知られた。昭和59年には、県調査地南側で能登島町(当時)事業に係る東部送水ポンプ場建設に先立ち、町教育委員会が県からの調査員派遣を受け発掘調査を実施(平田2001)している。約100mが対象であり、古墳時代前期と古墳時代終末~奈良時代前半の2層の生活面が確認され、特に上層で2×3間と推定される掘立柱建物1棟とこれと並行する櫓列が検出された。背後約250mの地点に立地する須曾蝦夷穴古墳(標高約78m)に近い時期かそれに後続する時期の集落であり、両者の関係が注意されるとともに製塩土器の出土から製塩集団との関わりも指摘されている。



第4図 調査区の位置と既往の調査 (S = 1/1,000)

第3節 調査の結果

(1) 概要

発掘区域は一辺約7.5mの方形を呈する。調査地は東から西に緩く下る箇所にあたり、地表標高は17.6m前後、遺構検出面標高は調査区南東端で17.4m、北西端で16.9mを測る。堆積土壌を調査区

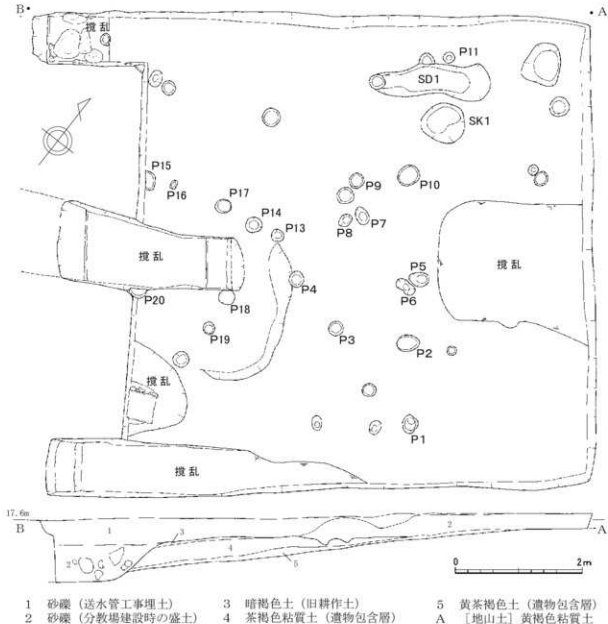
北西壁断面からうかがうと、上位から、送水管工事にともなう埋土（1層）、分教場建設時の盛土（2層）の下で旧耕作土（3層）が薄く遺存し、その下に茶褐色（4層）あるいは黄茶褐色（5層）を呈する遺物包含層が存在する。その下の地山土は黄褐色粘質土である。検出遺構は土坑（SK）1基、溝（SD）1条、小穴（P）20数個を数える。遺物をともなった遺構には番号を付しており、出土遺物総量はLII型パンケースにして1箱である。以下おもな遺構・遺物を記していく。

（2）検出遺構・遺物

SK1 調査区北側に位置する。直径約60cm、深さ13cmを測る不整形形の土坑。第6図1の須恵器坏蓋が出土している。

SD1 調査区北側に位置する。長さ1.9m、幅40～50cm、深さ13cmを測る。2の須恵器坏蓋、3の須恵器甕または横瓶、4の尖底製塩土器が出土している。

小穴 調査区内に散発的に分布する小穴は直径20～30cmのものが多く、深さは5～36cm、掘立柱



第5図 調査区全体図 (S=1/60)

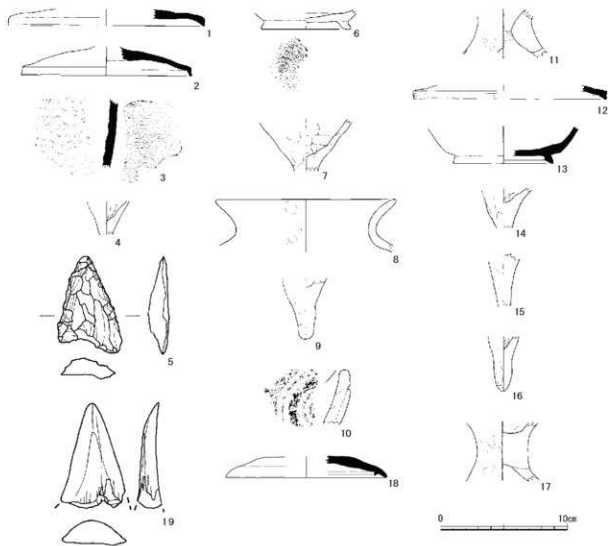
建物等の柱穴となるものは認められなかった。P 1 出土の5の安山岩製石鏃は長さ2.6cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重量1.6gを測る、P 7からは6の土師器有台碗、P 12からは7の尖底製塩土器が、P 18からは8の土師器甕口縁部、9の尖底製塩土器が出土している。

包含層出土遺物 10～16を図示した。10は縄文時代中期前葉の深鉢口縁部、11は土師器高坏、12・13はそれぞれ須恵器杯蓋、同有台杯、14～16は尖底製塩土器である。

表採遺物 17は土師器器台である。18はかえりを持つ須恵器杯蓋、19はサメ歯の化石とみられる。加工痕は認められない。能登島では半の浦礫岩層で産出が知られており、調査地周辺に分布した資料として掲載した。乳白色を呈し、残存長2.8cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm、重量1gを測る。

(3) 小 結

顕著な遺構は認められなかったものの、出土遺物においては3時期のあることが認められた。縄文時代中期前葉(10)、古墳時代前期(11)、古墳時代終末～奈良時代前半(6、8、13、17、18ほか大方の須恵器、土師器、製塩土器は当期の所産とみられる)である。後2期については町調査区と同様の時期幅を持つものであり、調査地がその一端にあたることが確認された。また、縄文時代の遺物からは当該期集落の存在が示唆された。



第6図 出土遺物実測図(5・19:S=1/1、他:S=1/3)

報告 番号	遺 構	種 類 器 種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm) 重量(g)	色 調 (内) 色 調 (外)	焼成	調 整 (内)		備 考	実測 番号
							調 整 (外)			
1	SK1	須恵器 蓋	(15.6)		灰色 純黄褐色	真		ヨコナデ ヨコナデ		20
2	SD1	須恵器 蓋		136	灰色 浅黄褐色	真		ヨコナデ ケズリ、ヨコナデ		18
3	SD1	須恵器 蓋			灰白色 灰白色	不真		同心円状具 平行タタキ、オキ目		21
4	SD1	製塩土器 実底			褐色 褐色	真		指ナデ、しぼり目 指ナデ		11
5	P1	石器 石鏃		長26 厚0.5	幅1.7 1.6				安山岩製	30
6	P7	土師器 有台椀		72	浅黄褐色 浅黄褐色	真		摩耗により不明 摩耗により不明、ヨコナデ		6
7	P12	製塩土器 実底			褐色 褐色	真		指ナデ、しぼり目 指ナデ		24
8	P18	土師器 蓋		142	浅黄褐色 浅黄褐色	真		摩耗により不明 摩耗により不明、ハケ		2
9	P18	製塩土器 実底			黒褐色 褐色	真		- 指おさえ		8
10	包含層	縄文土器 深鉢			灰黄色 灰黄色	真		ナデ 平段起線文	突起状口縁	23
11	包含層	土師器 器台			浅黄褐色 浅黄褐色	真		ナデ、しぼり目 ミオキ、ナデ	透かし穴4ヶ	4
12	包含層	須恵器 蓋	(15.4)		灰色 灰色	真		ヨコナデ ヨコナデ		22
13	包含層	須恵器 有台杯		80	灰色 灰色	真		ヨコナデ ヨコナデ、ヘラ切り		19
14	包含層	製塩土器 実底			褐色 褐色	真		指ナデ、しぼり目 指ナデ		7
15	包含層	製塩土器 実底			褐色 褐色	真		指ナデ 指ナデ		10
16	包含層	製塩土器 実底			褐色 褐色	真		指ナデ、しぼり目 指ナデ		9
17	表採	土師器 高杯			黒褐色 浅黄褐色	真		指頭圧痕、ナデ ミオキ		3
18	表採	須恵器 蓋		126	灰色 灰色	真		ヨコナデ ヨコナデ		32
19	表採	化石 サメ歯		長(28) 厚(0.6)	幅(1.7) (1.0)					31

第2表 出土遺物観察表

第3章 水白モンシヨ遺跡

第1節 調査の経緯と経過

羽中市から主要地方道七尾羽咋線（通称西往来）下を進んできた送水管は、中能登町能登部において県道久江・鹿西線に重なり邑知地溝帯を横断、調査地南西方の国道159号鹿島バイパス久江西交差点からはバイパス下を七尾市方向に進む経路をとる。調査地周辺ではバイパス建設に先行し送水管埋設工事を実施しており、当該区域については、昭和60年10月23日に埋蔵文化財の存在が確認され、事前に発掘調査を実施し記録保存とすることで調整された。その後、昭和60年11月8日付けで石川県企業局能登送水工事事務所から石川県立埋蔵文化財センターあてに発掘調査の依頼がなされ、11月13日付けで埋文センターは発掘調査計画書を提出、11月18日付けで能登送水工事事務所と埋文センター間で発掘調査委託契約が締結された。また、11月25日付けで文化財保護法第98条の2第1項の規定による発掘通知を文化庁あて提出している。

調査箇所は鹿島バイパス下り線側路肩下にあたり、バイパス小竹交差点から県道久江・鹿西線との交差点までの幅2m、延長150m、面積300㎡である。現地調査は発掘調査区を囲む鋼矢板打設をまっして11月18日に着手し、12月25日に終了した。調査担当者は田嶋明人（専門員）、中島俊一（主査）、栃木英道（主事）である。なお、調査時には水白A・B遺跡の名称のもと調査を実施したが、第2節に記した経緯により水白モンシヨ遺跡と改称されている。

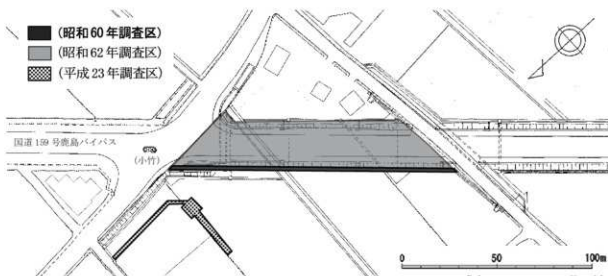


第7図 遺跡の位置 (S= 1/25,000)

第2節 既往の調査

遺跡は、邑知地溝帯東側に連なる石動山系ふもとに形成された扇状地扇側部に立地する。水白集落の北西方約500mにあたり、昭和33年に実施された区画整理の際に発見された。当初は水白A遺跡、水白B遺跡と呼称され、後に水白A・B遺跡、そして国道159号鹿島バイパス建設に係る報告（山本ほか1989）に際し、調査地付近の通称が「モンシヨ」との知見から水白モンシヨ遺跡と改称され現在にいたる。このバイパス工事にともない昭和62年に調査区南東側に接し2,600㎡が、また、平成23年には県営ほ場整備事業にともない北西側の水田中で280㎡の発掘調査が当センターにより実施されている。

昭和62年の調査では、弥生時代中期、古墳時代～中世の遺物が出土し、特に古墳時代中期後半～後期前半と鎌倉時代に盛期が認められた。検出遺構は鎌倉時代が主であり、竪穴状遺構1基、掘立柱建物9棟、溝多数などがある。そのうち、12世紀第4四半期～13世紀第1四半期に位置付けられる第101号土坑からは、下駄や卒塔婆、箸などの木製品とともに、木製農具「コロバシ」が出土している。平成23年の調査では、墨書土器「厨」、「真」を伴う平安時代前期の井戸1基や、中世の掘立柱建物3棟以上、古墳時代～中世の遺物をともなう溝などが確認されている。



第8図 調査区の位置と既往の調査 (S=1/2,000)

第3節 調査の結果

(1) 概要

調査区は北東端から10m毎に区分し1～14区とした。鋼矢板囲みの調査区が多く調査区壁土層は十分に採図できなかった。また、基準杭高の資料が失われており示せないが、鹿島バイパス工事にともなう発掘調査結果からうかがうと、調査地は東から西に緩く下る箇所にあたり地表標高は25～26m、遺構検出面標高は調査区北東端で25.2m、南西端で24.5mを測る。検出遺構は柱根や礎板を残す柱穴や多数の溝などであり、調査区の北東半部、2～8区に主に分布し9区より南西側では急に希薄となる。出土遺物量はLⅡ型パンケースにして4箱を数える。検出遺構には伴出遺物の有無にかかわらず全てに番号を付しているが、遺物をともなった遺構は竪穴状遺構1基、土坑(SK)1基、溝(SD)

7条、小穴（P）15個であり、以下ではそのうちの主なものについて記す。

（2）検出遺構・遺物

掘立柱建物 検出した小穴の中には柱根計8本、礎板1枚が遺存したほか柱穴と考えられるものがある。隣接するバイパス調査区においても多数の柱根、礎板が検出されており、12～13世紀代に位置付けられる最大で4×2間以上の建物など計9棟が復元されている。今回の調査区では建物プランは確定できなかったが、検出された柱穴、ピットはこれら建物の一部にあたるものであろう。

1号竪穴状遺構 3区に位置する。調査区西壁に接し全容は不明だが、バイパス調査区の結果から窺うと、一辺約2.8mの平面隅丸方形プランを呈する可能性がある。深さ30cm前後。1の土師器甕が出土している。

SK1 5区に位置し、調査区外にのびる。鞍部との判断から上半部の掘削にとどめた。検出位置からみてバイパス調査区検出の101号土坑と一連の遺構の可能性はある。101号土坑については直径約4mの隅丸方形に近い円形を呈する土坑と推測されており、深さは約60cm、12世紀第4四半期～13世紀第1四半期に位置付けられている。

SD1 4区に位置し、東西を向く。幅230cm、深さ20cmを測る。2の中世土師器皿が出土している。

SD2 2区に位置し、南北を向く。幅35cm、深さ10cmを測る。3の土師器甕が出土している。

SD4 5区に位置し、南北を向く。幅30cm、深さ32cm。4、5の土師器椀、高坏が出土している。

SD6 4区に位置し、南西～北東を向く。幅30～35cm、深さ10cmを測る。6の土師器高坏が出土している。

SD7 3区に位置し、調査区を南東～北西に横断する。幅30cm、深さ13cmを測る。周辺から7の土師器鉢が出土している。

SD10 7・8区に位置し、調査区を南東～北西に横断する。幅1.1m、深さ15cmを測る。

SD11 8区に位置し、調査区を南東～北西に横断する。幅65cm、深さ15cmを測る。

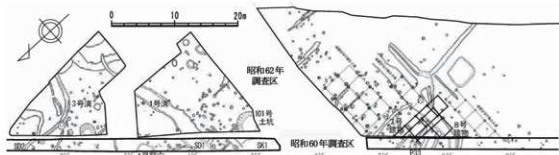
SD12 8区に位置し、調査区を南東～北西に横断する。幅約50cm、深さ26cmを測る。

小穴出土遺物 P11からは8の中世土師器皿が、P24・25周辺からは9・10の土師器甕や11の壺、12の陶器碗が、P33からは13の土師器椀、14～16の中世土師器皿が、P37からは17の中世土師器皿、18の青磁碗が出土している。

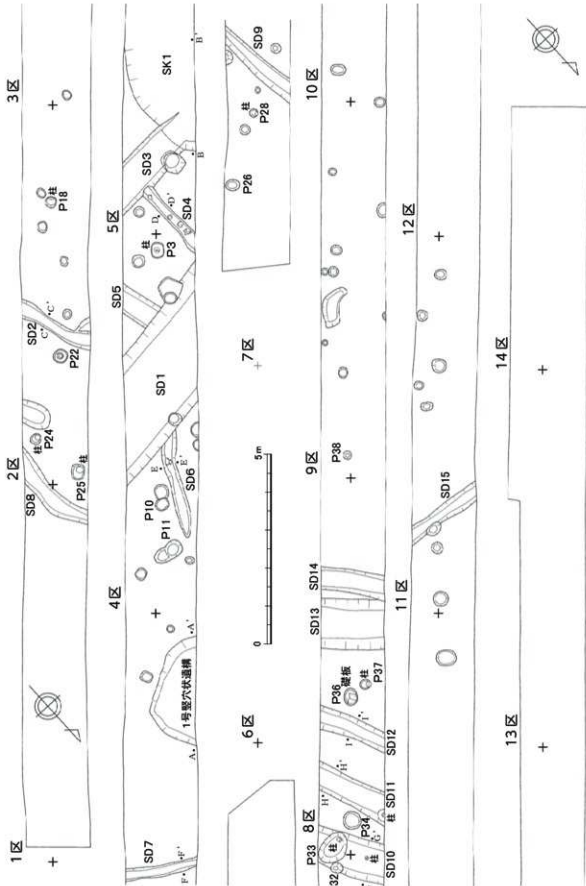
その他遺物 19～32は遺構検出面で出土した土器である。古墳時代前期（19、26）、同中～後期（21～25、27～29）、平安時代前期（30）、鎌倉時代（31、32）などがある。

（3）小 結

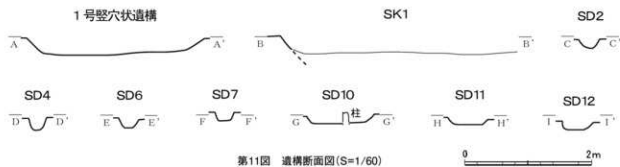
検出された遺構について、1号竪穴状遺構、SD2・4・6が古墳時代中期後半～後期前半に、S

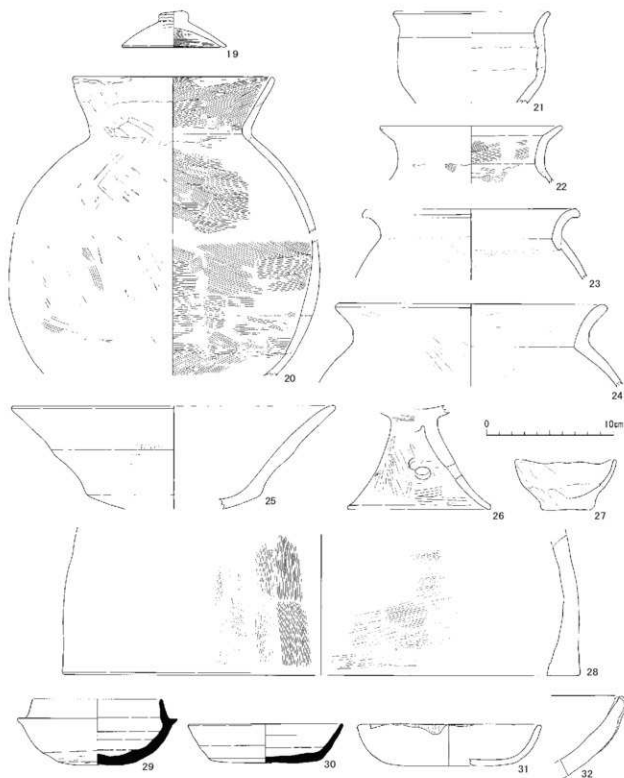


第9図 調査区合成図（S=1/600）



第10図 調査区全体図 (S = 1/100)





第13図 出土遺物実測図2(S=1/3)

D 1、P 11・33・37が鎌倉時代に位置付けられる。第9図に示した昭和62年調査区との合成図から配置を窺うと、そのうちのSD 1・2がそれぞれ1・3号溝に、P 33とその周囲の柱根、ピットに7・8号掘立柱建物柱穴となる可能性が指摘され、SK 1は101号土坑と一連ともみられる。今回の調査区は狭小だが平成23年度の調査結果を合わせ遺跡の様相がより明らかになるものと思われる。

第3節 調査の結果

報告 番号	地区 遺構	種類 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm) 重量(g)	色調(内) 色調(外)	構成	調整(内)		備考	実測 番号
							調整(内)	調整(外)		
1	3区西端	土師器		160	鈍褐色	並	ハケ		C20	
	1号型穴状遺構	壺			褐色		ハケ			
2	4区	中世土師器	91	145	浅黄褐色	並	ヨコナデ、ナデ		C4	
	SD 1	皿	85		浅黄褐色		ヨコナデ			
3	2区	土師器	195		浅黄褐色	並	ハケ		C3	
	SD 2	壺			鈍黄褐色		ヨコナデ、ハケ			
4	5区	土師器	140	60	鈍褐色	並	ヨコナデ、ミガキ		C15	
	SD 4	甗	73		鈍褐色		ヨコナデ、ミガキ			
5	4区	土師器	168		鈍褐色	並	ナデ、ミガキ		C16	
	SD 4	高坏			鈍褐色		ミガキ			
6	4区	土師器	173	132	鈍黄褐色	並	ミガキ、ケズリ、ハケ		C5	
	SD 6	高坏	117		鈍黄褐色		ヨコナデ、ハケのちミガキ、ミガキ、ケズリ			
7	3区	土師器	145		鈍黄褐色	並	ミガキ		C6	
	SD 7周辺	鉢			鈍黄褐色		ハケ			
8	4区	中世土師器	90	20	鈍黄褐色	並	ヨコナデ、ナデ		C2	
	P 11	皿	80		鈍黄褐色		ヨコナデ、ナデ			
9	2区	土師器	157		鈍黄褐色	並	ハケ、ヘラケズリのちハケ		C9	外面保存者
	P 24・25周辺	壺			鈍黄褐色		ハケ、ハケ一部ナデ			
10	2区	土師器	154		鈍黄褐色	並	ハケ		C30	
	P 24・25周辺	壺			鈍黄褐色		ヨコナデ、ハケのちケズリ			
11	2区	土師器	157		灰褐色	並	ハケのちヘラミガキ		C29	浮文3本1組全体数不明
	P 24・25周辺	壺			鈍黄褐色		ハケのちヘラミガキ			
12	2区	陶器			灰オリーブ色	並	-		C13	継戸?、内面貫入あり
	P 24・25周辺	甗	52		灰白色		ケズリだし、ヘラケズリ			
13	7・8区	土師器			浅黄褐色	並	ナデ		C10	
	P 33	甗	58		褐色		摩耗の為不明			
14	7・8区	中世土師器	79	16	鈍褐色	並	ヨコナデ		C32	
	P 33	皿	72		鈍黄褐色		ヨコナデ、ナデ			
15	7・8区	中世土師器	97	20	鈍黄褐色	並	ヨコナデ		C11	
	P 33	皿	83		鈍黄褐色		ヨコナデ			
16	7・8区	中世土師器	112	24	浅黄褐色	並	摩耗の為不明		C31	
	P 33	皿	64		浅黄褐色		摩耗の為不明			
17	8区	中世土師器	86	15	鈍黄褐色	並	ヨコナデ、ナデ		C7	
	P 37	皿	72		鈍褐色		ヨコナデ、ナデ			
18	8区	青磁	148		灰白-ア色	並	-		C8	内外面貫入あり
	P 37	甗								
19	2区東側	土師器	83	29	鈍黄褐色	並	ハケ		C21	つまみ径2cm、外面および内面の一部赤彩
		壺			赤褐色		ヘラミガキ			
20	1区西・2区東	土師器	160		灰褐色	並	ハケ一部ヘラケズリ		C1	
		壺			灰褐色		ヘラケズリのちナデ一部ハケ			
21	1・2区	土師器	120		鈍褐色	並	ヨコナデ、ナデ		C24	
		小型壺			鈍褐色		ヨコナデ、ハケ			
22	2区東側	土師器	144		鈍黄褐色	並	ヨコナデ、ハケ		C23	
		壺			鈍黄褐色		ヨコナデ、ハケ			
23	1・2区	土師器	166		鈍褐色	並	ヨコナデ、ハケ		C28	
		壺			鈍褐色		ヨコナデ、ハケ			
24	5区	土師器	210		鈍黄褐色	並	ヨコナデ、ハケ		C18	
		壺			鈍褐色		ヨコナデ、ハケ			
25	5区	土師器	253		鈍褐色	並	摩耗の為不明		C17	
		高坏			鈍褐色		ハケ			
26	2区東側	土師器			鈍赤褐色	並	ハケ		C22	外面および内面の一部赤彩
		高坏	113		赤褐色		ハケのちヘラミガキ			
27	1区西・2区東	土師器	78	40	鈍黄褐色	並	ナデ		C27	
		手捏ね土師	39		鈍黄褐色		ナデ			
28	1区西・2区東	土師器		(40.8)	鈍褐色	並	ハケ		C26	
		薬形土師			鈍褐色		ハケ			
29	1区西・2区東	胆壺器	102	53		並	ロクロナデ		C25	
		坏	35		灰色		ロクロナデ、ヘラケズリ			
30	5区	胆壺器	121	31	灰白色	並	ロクロナデ		C14	
		無台坏	90		灰白色		ロクロナデ、回転ヘラ切り			
31	3区西・4区東	中世土師器	142	33	鈍褐色	並	ヨコナデ、ナデ		C19	油漉痕あり
		甗	121		鈍褐色		ヨコナデ、ナデ			
32	3・4区	陶器			灰色	並	ロクロナデ		C12	珠洲焼
		片口鉢			灰色		ナデ、ロクロナデ			

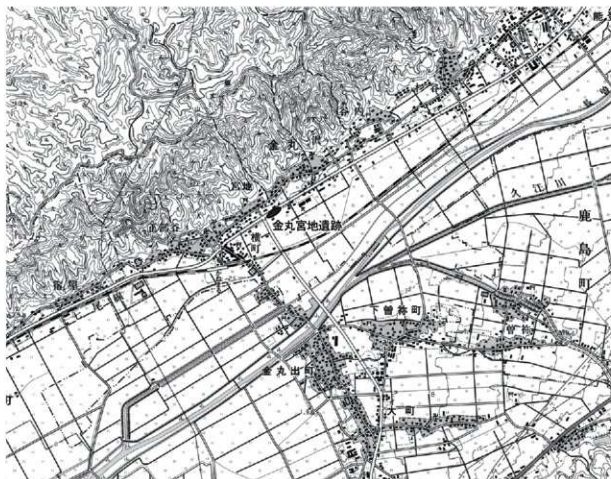
第3表 出土遺物観察表

第4章 金丸宮地遺跡

第1節 調査の経緯と経過

能登半島中央部を北東から南西に横断する邑知地溝帯西側に沿っては、その両端に位置する羽咋市と七尾市を結ぶ主要地方道七尾羽咋線（通称西往来）が走るが、調査箇所は鹿島郡中能登町金丸地内にあつてその上り線下にあたる。第2節に記すように遺跡の所在は周知されていたが、幹線道路下であり事前に分布範囲が決定できなかったことから、事業者と協議し、送水管埋設工事に並行する形で、西側から10数mずつ、矢板敷設、埋文の有無確認、埋文ありの場合発掘調査実施、送水管埋設工事実施を繰り返しながら発掘調査を進めることとなった。昭和58年4月14日付けで石川県企業局能登送水工事事務所から石川県立埋蔵文化財センターあてに発掘調査の依頼がなされ、埋文センターは8月15日付けで発掘調査計画書を提出、同日、能登送水工事事務所との間で発掘調査委託契約が締結された。また、8月25日付けで文化財保護法第98条の2第1項の規定による発掘通知を文化庁あて提出している。

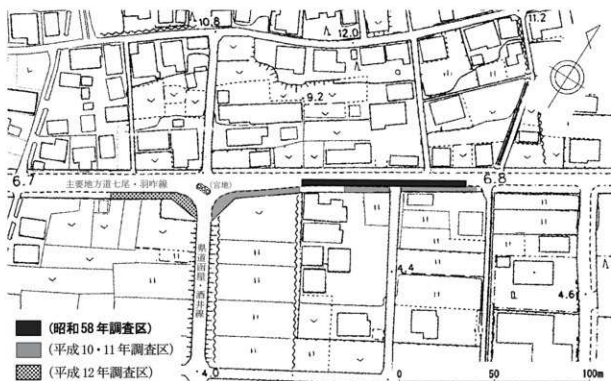
調査箇所は、宮地交差点から東に約40mの地点から七尾方向に向かう幅2m、延長90mの区間であり、面積は180m²である。現地調査は9月19日に着手し、10月28日に終了した。調査担当者は平田天秋（専門員）、垣内光次郎（主事）である。



第14図 遺跡の位置 (S=1/25,000)

第2節 既往の調査

遺跡は、邑知地溝帯西側に連なる眉丈山系から下る河川により形成された小扇状地扇端に立地する。昭和35年に行われた区画整理の際に金丸地内中程に位置する宮地地区において発見された遺跡であり、同年には遺跡の性格を確認するため石川考古学研究会により23m²のトレンチ調査が行われた（吉岡・橋本1966）。面積は23m²であったが古墳時代中期、平安時代中期の良好な資料が得られ、特に古墳時代中期の土器は宮地式として標識資料に位置付けられている。また、七尾・羽沖線東側に沿った歩道整備工事にともない平成10・11年に580m²（安井2003）、平成12年に800m²（三浦2003）の発掘調査が実施された。昭和35年調査時と同時期の遺物も出土したが、その際の出土遺物の主体は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭、奈良時代、中世であった。遺構は弥生時代では堅穴建物、木棺墓の可能性のある土坑、溝などを、古墳時代では溝や杭列のほか中期もしくは後期とみられる畦畔状遺構などを、古代～中世では井戸や溝、土坑などを検出した。これら調査の結果では各時代の遺物分布に偏りのあることが窺われており、平成12年調査の際には現水田下10cm～120cmの間に6面の生活面が確認されるなど、急峻をなす眉丈山系の麓にあってたびたび土砂流入を受ける立地のもと、時々集落を遷した状況が知られるものである。



第15図 調査区的位置と既往の調査 (S = 1/2,000)

第3節 調査の結果

(1) 概要

調査区は南西端から10m毎に区分し、Ⅰ～Ⅸ区とした。銅矢板囲みの調査区であったため調査区壁土層は採図できなかつた。調査地は西から南あるいは東に緩く下る箇所にあたり、道路上で標高6.7m、南接する水田面で標高6.2～6.4mを測る。ⅠからⅧ区杭以東3mまでは2面の生活面が存在した。この間の下面についてはトレンチを設け確認したが、遺物は分布するものの遺構は認められない状況であったことから、面的な調査を行ったのはⅧ区杭以東3mの区間のみである。上面の遺構検出面標高は5.3m前後、下面の遺構検出面標高は4.4～4.7mを測る。検出遺構は遺物をともなったものについて各区毎に1から番号を付けた。掘立柱建物、大型土坑状遺構1基、敷石状遺構1基、溝(SD)3条、小穴(P)多数であり、小穴には柱根を残すものも認められた。以下ではそのうちの主なものについて記す。出土遺物総量はLⅡ型パンケースにして6箱を数える。

(2) 検出遺構・遺物

掘立柱建物 Ⅷ区以東において柱穴とみられる小穴多数を検出した。上・下層ともに存在し、特に上層ではⅧ区を主に直径10cm前後の柱根5本が遺存した。狭長な調査区にあっては建物プランは確定できていないが、南北からやや西寄りに軸を持つ建物の存在が推測される。

敷石状遺構 Ⅷ区上層に位置する。SD2東側において縦約1.2m、横約2mの範囲に5～10cm大の自然礫が密に分布しており、掘立柱建物に付随する等した何らかの用途をもった敷石とみる。礫中から8の土師器有台碗が出土している。田嶋編年(田嶋1988)Ⅴ期のもの。

SD1 Ⅷ区上層に位置し、調査区を北西-南東に横断する。幅75cm、深さ10cmを測る。1、2の須恵器蓋、無台杯が出土している。田嶋編年Ⅴ期のもの。

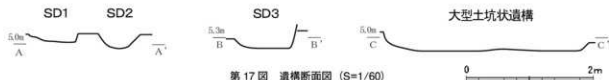
SD2 Ⅷ区上層に位置し、調査区を北西-南東に横断する。幅60cm、深さ10cmを測る。3・4の須恵器蓋、有台杯が出土している。田嶋編年Ⅴ期のもの。

SD3 Ⅷ区上層に位置し、調査区を北西-南東に横断する。幅約1m、深さ40cmを測る。5の中世土師器皿が出土している。内面に油煙痕が残る。四柳編年(四柳1997)Ⅱ期のもの。

杭列 Ⅰ・Ⅱ区上層では、緩く屈曲しながら調査区を西-東に横断する杭列が存在した。長さ約100m、時期は不明確だが近世以降の水路にともなう遺構とみられる。

大型土坑状遺構 Ⅷ区下層に位置する。縦約1.5m、横約2.8m、深さ18cmを測る性格不明の土坑状遺構。9、10の須恵器有台杯が出土している。田嶋編年ⅣないしⅤ期のもの。

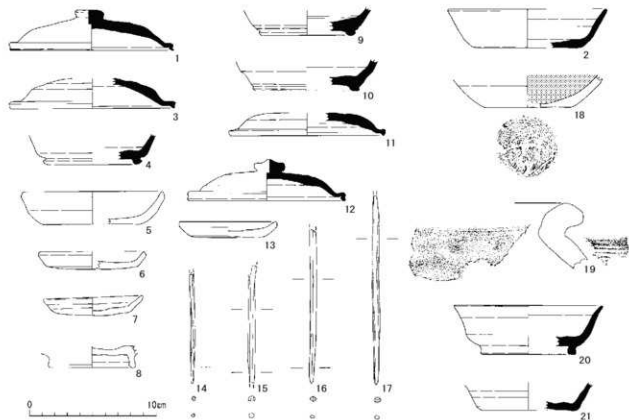
小穴出土遺物 12～17はⅧ区P3出土。12は須恵器蓋、13は中世土師器小皿、14～17は箸状木製品である。18はⅧ区P7・8出土の内面黒色土師器無台杯であり、外面は赤彩する。19はⅧ区P11出土の珠洲焼甕。20はⅧ区P12出土の須恵器有台杯。21はⅧ区P17出土の須恵器無台杯。22はⅧ区P15出土の須恵器無台杯。23はⅧ区P4出土の土師器甕。24はⅧ区P7出土の須恵器蓋である。



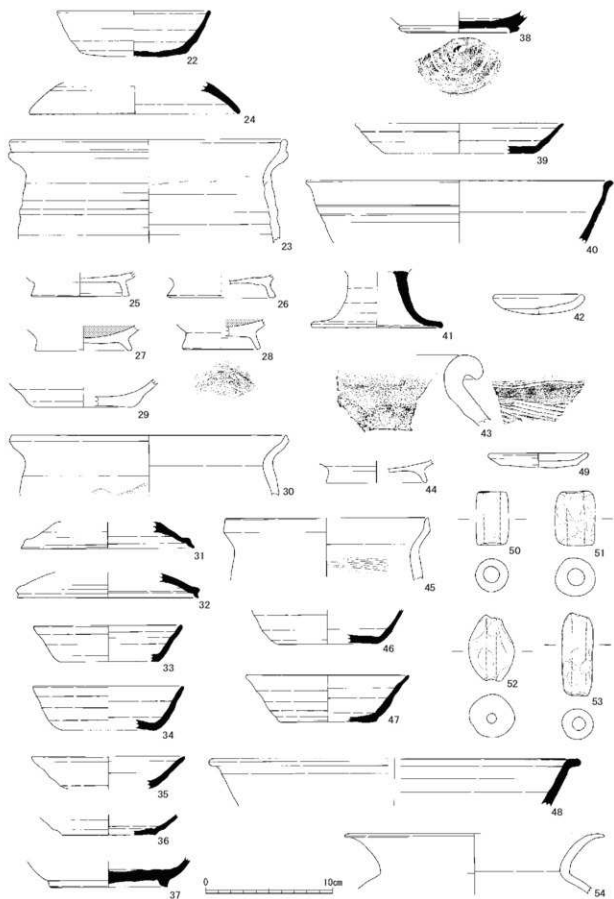
包舍層等出土遺物 25～30, 44, 45は古代の土師器、碗はⅥ期に比定されよう。31～41, 46～48はⅤ～Ⅵ期に位置付けられる須恵器である。45は古墳時代の土師器甕である。42, 43, 49は中世の遺物であり、四柳編年Ⅱ期に比定されよう。54は調査区南側の工事箇所で採集されたもので、古墳時代後期の土師器甕である。

(3) 小 結

調査区域は金丸宮地遺跡の東半部にあたる。遺構は主にⅥ区以東に分布した。ここで検出した多数のピットからは、プランは確定できないが南北からやや西寄りに軸を持つ掘立柱建物が想定された。またⅥ・Ⅶ区上層では溝3条や敷石状遺構を、Ⅶ区下層では大型土坑状遺構などを確認し、ほかⅠ・Ⅱ区では近世以降の水路にともなうとみられる杭列を確認した。生活面は上層と下層が識別された。出土遺物から大きく奈良～平安時代前半、鎌倉時代の2時期あることが窺われたが、各層出土遺物は両時期が混在しており、検出した掘立柱建物柱穴についても両時期が重複する可能性が高い。また、従来知られる弥生時代後期～古墳時代中期の遺構、遺物は今回の調査区域では確認されず、当該期の集落については遺跡の西半部に主体をおくものと判断される。



第18図 出土遺物実測図1 (S=1/3)



第19図 出土遺物実測図2 (S=1/3)

報告 番号	地区 遺構	種類 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm) 重量(g)	色調(内) 色調(外)	焼成	調整(内)		備考	実測 番号
							調整	調整(外)		
1	Ⅴ区上層 SD 1	須恵器 蓋	130	32	灰色	真			つまみ径 23cm	30
	Ⅴ区上層 SD 1	須恵器 有台杯	128	31	灰黄色					
2	Ⅴ区上層 SD 1	須恵器 蓋	48		灰黄色	真			へう切り	109
	Ⅴ区上層 SD 2	須恵器 有台杯	132		灰色					
3	Ⅴ区上層 SD 2	須恵器 蓋	74		灰色	真			底部回転へう切り	13
	Ⅴ区上層 SD 3	中世土師器 皿	110	26	純黄褐色					
4	Ⅴ区上層 SD 3	中世土師器 皿	75		純褐色	真			内面に油煙痕	16
	Ⅴ区上層 P 2	中世土師器 皿	86	15	純黄褐色					
5	Ⅴ区上層 P 2	中世土師器 皿	72		純黄褐色	真			ナデ、底部に一部ハケ ナデ、底部に圧痕あり	107
	Ⅴ区上層 P 4	土師器 皿	79	16	純黄褐色					
6	Ⅴ区上層 P 4	土師器 皿	57		純黄褐色	真			ナデ、底部に圧痕あり	27
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純黄褐色					
7	Ⅴ区上層 土師器	土師器	69		純黄褐色	真			底部糸切り小	28
	Ⅴ区上層 有台杯	有台杯	70		灰色					
8	Ⅴ区上層 有台杯	有台杯	70		灰色	真			底部回転へう切り	17
	Ⅴ区上層 須恵器	須恵器	84		灰色					
9	Ⅴ区上層 須恵器	須恵器	124		灰色	真			底部回転へう切り	11
	Ⅴ区上層 有台杯	有台杯	121		灰色					
10	Ⅴ区上層 有台杯	有台杯	84		灰色	真			へう切り	20
	Ⅴ区上層 須恵器	須恵器	126	33	灰色					
11	Ⅴ区上層 須恵器	須恵器	126	33	灰色	真			つまみ径 24cm	25
	Ⅴ区上層 蓋	蓋			灰色					
12	Ⅴ区上層 蓋	蓋	78	13	灰黄色	真			ナデ、ナデ	110
	Ⅴ区上層 皿	皿	6	6	灰黄色					
13	Ⅴ区上層 皿	皿	6	6	灰黄色	真			ヨコナデ、ナデ	110
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			黒色					
14	Ⅴ区上層 土師器	土師器			黒色	真			ヘラミガキ ヘラケズリ、ロクロナデ、底部回 転糸切り	14
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			浅黄褐色					
15	Ⅴ区上層 土師器	土師器	68		浅黄褐色	真			底部外面へう記号 「-」あり	14
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色					
16	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色	真			ヨコナデ	114
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色					
17	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色	真			波状文、ヨコナデ、タタキ	9
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色					
18	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色	真			ロクロナデ、底部回転へう切り	4
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色					
19	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色	真			ロクロナデ、底部回転へう切り	108
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色					
20	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色	真			ロクロナデ、へう切り、ナデ	108
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色					
21	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色	真			ヨコナデ	101
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純黄褐色					
22	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純黄褐色	真			ヨコナデ	101
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純黄褐色					
23	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純黄褐色	真			ロクロナデ	21
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色					
24	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色	真			ロクロナデ	21
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色					
25	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色	真			ロクロナデ	21
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純褐色					
26	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純褐色	真			ロクロナデ、底部糸切り	22
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純褐色					
27	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純褐色	真			摩耗により不明	12
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純褐色					
28	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純褐色	真			ロクロナデか、底部摩耗により不 明	12
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純褐色					
29	Ⅴ区上層 土師器	土師器			純褐色	真			ヨコナデ、ナデ	124
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			黒色					
30	Ⅴ区上層 土師器	土師器			黒色	真			ヘラミガキ	15
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			黄灰色					
31	Ⅴ区上層 土師器	土師器			黄灰色	真			ロクロナデ、底部回転へう切り	21
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色					
32	Ⅴ区上層 土師器	土師器			灰色	真			ヘラミガキ	21
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			浅黄褐色					
33	Ⅴ区上層 土師器	土師器			浅黄褐色	真			ヨコナデ	102
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			浅黄褐色					
34	Ⅴ区上層 土師器	土師器			浅黄褐色	真			ヨコナデ、ハケ目	102
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			浅黄褐色					
35	Ⅴ区上層 土師器	土師器			浅黄褐色	真			ロクロナデ	19
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			浅黄褐色					
36	Ⅴ区上層 土師器	土師器			浅黄褐色	真			ロクロナデ、回転へう切り	19
	Ⅴ区上層 土師器	土師器			浅黄褐色					

第4表 出土遺物観察表1

第3節 調査の結果

報告 番号	地区 遺構	種類 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm) 重量(g)	色調(内) 色調(外)	焼成	調整(内)		備考	実測 番号
							調整(内)	調整(外)		
32	Ⅱ区 南端包含層	須恵器 蓋	145		灰色	良	ロクロナデ			18
							ロクロナデ			
33	Ⅱ区 包含層	須恵器 瓶台杯	118 78	39	灰色	良	ロクロナデ			10
							ロクロナデ			
34	Ⅱ区 包含層(農道部分)	須恵器 瓶台杯	120 80	40	灰色	良	ロクロナデ			7
							ロクロナデ、底部回転ヘラ切り			
35	Ⅱ区南端 包含層	須恵器 瓶台杯	122 64		灰色	良	ロクロナデ			3
							ロクロナデ			
36	Ⅱ区南端 包含層	須恵器 瓶台杯	75		灰色	良	ロクロナデ			113
							ロクロナデ、ヨコナデ			
37	Ⅱ区 サブトレンチ	須恵器 有台杯	94		灰色	良	ロクロナデ			29
							ロクロナデ、底部回転ヘラ切り			
38	Ⅱ区 包含層	須恵器 有台杯	96		灰色	良	ロクロナデ		底部外面ヘラ記号 「-」あり	26
							ロクロナデ、底部回転ヘラ切り			
39	Ⅱ区 上層包含層	須恵器 壺	165 116	24	灰色	良	ロクロナデ			6
							ロクロナデ、底部回転ヘラ切り			
40	Ⅱ区 包含層	須恵器 鉢	244		灰色	良	ロクロナデ			8
							ロクロナデ、四隅3条			
41	Ⅱ区 サブトレンチ北方	須恵器 高杯	106		灰白色	良	ロクロナデ			111
							ロクロナデ			
42	Ⅱ区北端 包含層	中世土師器 皿	7.3 5.8	16	純黄褐色 純黄褐色	良	ヨコナデ、ナデ			104
							ヨコナデ			
43	Ⅱ区 上層包含層	珠西焼 甕			灰色	良	ヨコナデ			123
							ヨコナデ、タタキ			
44	Ⅱ区 下層包含層	土師器 有台碗	164 80		純黄褐色 褐色	良	ロクロナデ、摩耗により不明			2
							ロクロナデ、底部摩耗により不明			
45	Ⅱ区 下層包含層	土師器 甕	62	27	純黄褐色 純黄褐色	良	ヨコナデ、ハケ目			125
							ヨコナデ			
46	Ⅱ区 下層包含層	須恵器 瓶台杯	80		灰色	良	ロクロナデ			1
							ロクロナデ、底部回転ヘラ切り			
47	Ⅱ区 下層包含層	須恵器 瓶台杯	130 78	37	灰白色	不良	ロクロナデ			5
							ロクロナデ、底部回転ヘラ切り			
48	Ⅱ区 下層包含層	須恵器 鉢	(296)		灰色	良	ロクロナデ			112
							ロクロナデ			
49	Ⅱ区 下層包含層	中世土師器 皿	80 62	1.2	灰白色	良	ヨコナデ、ナデ			106
							ヨコナデ、ナデ			
50	Ⅱ区 包含層	土製品 土鉢	4.3 26	3.0	純黄褐色	良	ナデ		孔径1.3cm	116
							ナデ			
51	Ⅱ区 包含層	土製品 土鉢	4.3 3.2	3.0	純黄褐色	良	ナデ		孔径1.4cm	117
							ナデ			
52	Ⅱ区 包含層	土製品 土鉢	5.2 3.7	3.4	純黄褐色	良	ナデ		孔径0.8cm	118
							ナデ			
53	Ⅱ区 包含層	土製品 土鉢	6.6 2.5	2.4	純黄褐色	良	ナデ		孔径1.1cm	115
							ナデ			
54	Ⅱ区 工事区域	土師器 壺	206		純褐色	良	摩耗により不明			103
							摩耗により不明			

第5表 出土遺物観察表2



遺跡遠景 (西から)



完掘状況 (南東から)



完掘状況 (北から)



調査区北東半 完掘状況 (南から)



SK1、SD1 (南西から)



発掘作業風景 (南東から)



出土遺物



1～3区 完掘状況（北東から）



7～14区 完掘状況（北東から）



B区 完掘状況（南西から）



1号竖穴状遺構（南東から）



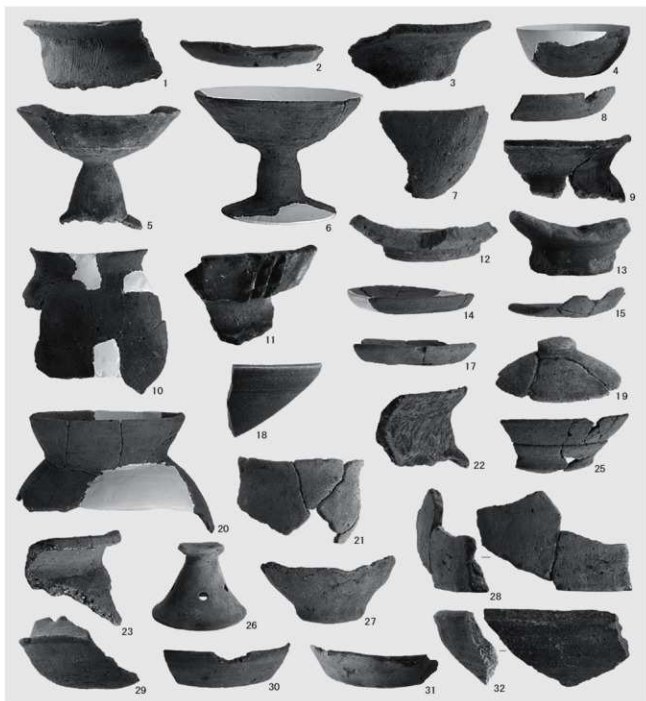
7・8区 SD9～13（北東から）



SD4 (南から)



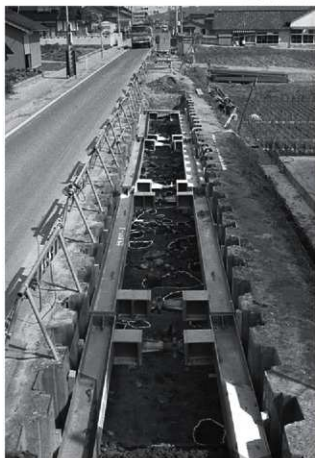
SD12, P36・37 (南東から)



出土遺物



IV区 突掘状況 (北東から)



VII・VIII区 突掘状況 (南西から)



IX区 突掘状況 (北東から)



I区 杭列 (南東から)



VI区 SD1・2、敷石状遺構 (南東から)



VI・VII区上層 柱根検出状況 (北東から)



Ⅵ区 大型土坑状遺構 (北東から)



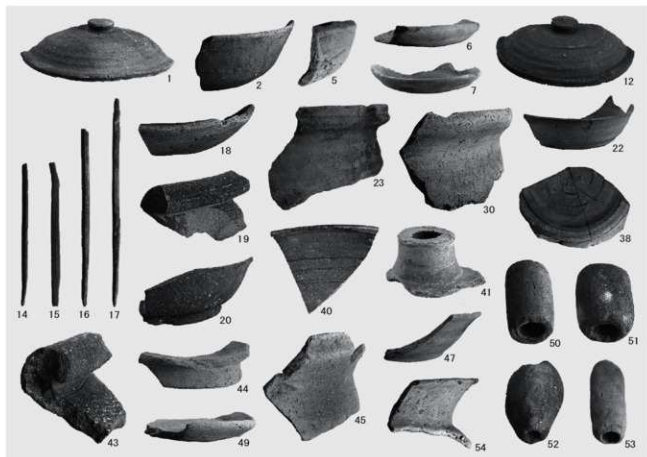
Ⅵ区下層 P2・17周辺 (北東から)



Ⅵ区 P2柱根検出状況 (南西から)



Ⅵ区 P12遺物出土状況 (南東から)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ななおし すそうわだらいせき なかのとまち みじろもんしよいせき かねまるみやじいせき							
書名	七尾市 須曾ウワダラ遺跡 中能登町 水白モンシヨ遺跡 金丸宮地遺跡							
副書名	石川県水道用水供給事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	澤辺利明							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2012年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
須曾ウワダラ遺跡	石川県七尾市 能登島須曾町	17202	35062	37度 6分 23秒	136度 57分 48秒	19850613 ～ 19850620	100㎡	
水白モンシヨ遺跡	石川県鹿島郡 中能登町小竹・ 尾崎	17407	34055	36度 57分 30秒	136度 53分 36秒	19851118 ～ 19851225	300㎡	記録保存 調査
金丸宮地遺跡	石川県鹿島郡 中能登町金丸	17407	36014	36度 56分 48秒	136度 50分 23秒	19830919 ～ 19831028	180㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
須曾ウワダラ遺跡	集落跡	古墳時代・ 奈良時代	土坑、溝、小穴	縄文土器、土師器、 須恵器、製塩土器、 石礫				
水白モンシヨ遺跡	集落跡	古墳時代・ 鎌倉時代	掘立柱建物、土 坑、溝、小穴	土師器、須恵器、 中世土師器				
金丸宮地遺跡	集落跡	奈良～平安 時代前半、 鎌倉時代	掘立柱建物、土 坑、溝	土師器、須恵器、 中世土師器、珠洲 焼、木製品				
要約	<p>・須曾ウワダラ遺跡：古墳時代前期、古墳時代終末～奈良時代前半を主とする集落遺跡であり、背後約250mの地点に存在する須曾蝦夷穴古墳との関係が注意される。また、縄文時代中期前葉の遺物も出土し周辺に該期集落のあることが推測される。</p> <p>・水白モンシヨ遺跡：古墳時代中期後半～後期前半、鎌倉時代を主とする集落遺跡である。</p> <p>・金丸宮地遺跡：弥生時代後期後葉～鎌倉時代の遺跡であるが、遺跡域東半部を対象とした今回の調査では、奈良～平安時代前半、鎌倉時代の集落跡が確認された。</p>							

七尾市 須曾ウワダラ遺跡
中能登町 水白モンシヨ遺跡
金丸宮地遺跡

発行日 平成24（2012）年3月30日

発行者 石川県教育委員会
〒920-8575 石川県金沢市銀月1丁目1番地
電話 076-225-1842（文化財課）
財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477
E-mail address maib@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 鶴川印刷株式会社